

三燕および日本出土鉄製刀剣の比較研究

豊島直博

はじめに

三燕の墳墓と日本の古墳には、多量の金属器を副葬するという共通点がある。また、墓制のみならず副葬品の内容にも共通点が多いことは、馬具や装身具の研究から明らかにされてきた(穴沢・馬目1973、藤井2003)。当然ながら、同様な共通性は鉄製武器にも認められると予測できる。そこで本稿では、刀剣に焦点を当てて三燕と日本出土武器の比較研究を試みる。なお、必要に応じて三燕以外の中国、朝鮮半島の刀剣にも言及したい。

1 鉄本体の比較研究

①環頭大刀

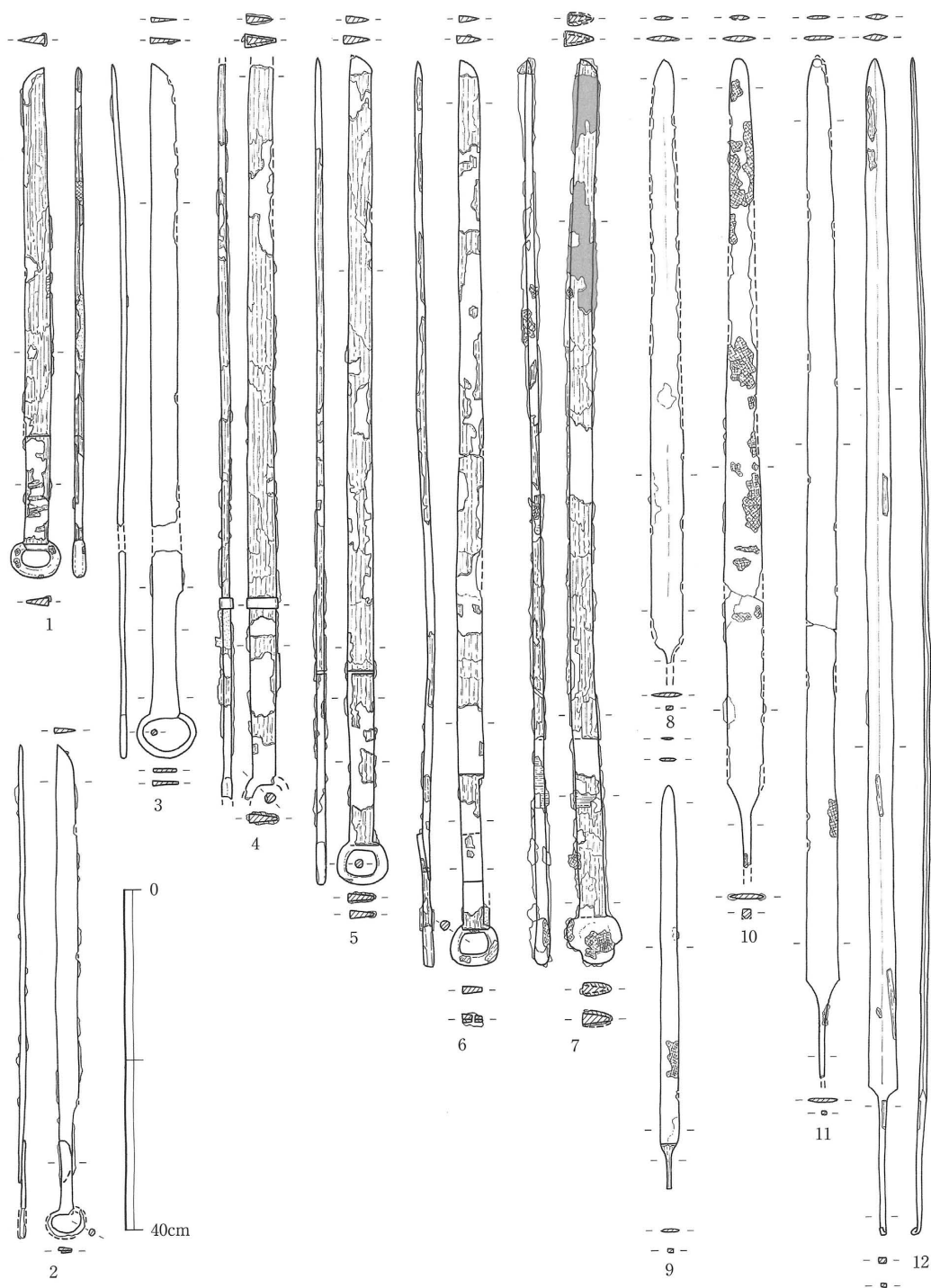
三燕の環頭大刀 まず、三燕の環頭大刀の全体像を概観しておこう。図1-1～7に掲げたのは三燕と中国出土の環頭大刀である(1のみ、中国出土であるが詳しい出土地は不明¹⁾)。喇嘛洞遺跡出土例(遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所2004)はすべて素環頭大刀である。十二台88M1号墓例(7)のみ三累環刀の可能性が高いが、X線撮影をおこなっていないため、型式はわからない。

環頭大刀を分類する属性には、全長、環の製作技法、環の形、切先の形など、様々な要素があり、多くの先学が詳細な分類をおこなっている(児玉1982、今尾1982、禹1991、池淵1993、川越1993)。筆者も弥生時代の素環刀を分類する際に、環の構造に着目した(豊島2005)。同じ視点は三燕と日本の素環刀を比較するうえでも有効であろう。

別作りと共作り 環頭大刀には刀身から環までを一体で作るものと、環から茎までの部分を別に作り、直刀の茎と重ねて固定するものがある。前者を共作り、後者を別作りと呼ぶ²⁾。

喇嘛洞遺跡では、共作りが3例、別作りが2例出土している。別作りはどちらも、重ね合わせる部分を薄く作る(図版17-5・6、図2-4)。表面観察では、目釘を使って固定しているのかどうか判別できない。

日本の環頭大刀では、奈良県東大寺山古墳で別作りの青銅製環頭を取り付けた例があるが(梅原1962)、決して一般的な存在とはいえない。いっぽう、朝鮮半島では韓国・玉城里58号墓、下鳳里12号墓で別作りの例が出土している(村上2001:66頁)。



1. 穴沢啄光氏蔵 2. 喇嘛洞Ⅱ M209 3. 喇嘛洞Ⅱ M49 4. 喇嘛洞Ⅱ M266 5. 喇嘛洞Ⅱ M3
6. 喇嘛洞Ⅰ M10 7. 十二台88M1 8. 喇嘛洞Ⅱ M209 9. 喇嘛洞Ⅱ M363 10. 喇嘛洞Ⅱ M266
11. 喇嘛洞Ⅱ M49 12. 喇嘛洞Ⅰ M10

図1 中国および三燕出土の環頭大刀と剣

②剣

三燕の鉄剣 喇嘛洞遺跡では、6点の鉄剣が出土している。図1-8～12にはそのうち5点を図示した。残存長70cmを超える長剣が4点、50cm未満の短剣が2点で、長剣のほうが多い。細部に着目すると、①関は斜めに切れ込む、②茎が細長い、という特徴をもつ。I M10号墓例(図1-12)は、茎の先端を「の」字状に折り曲げる。茎には木製把の痕跡が残っている。おそらく、把を装着したのちに、把が抜けないように茎の先端を折り曲げたのであろう。

日本の弥生時代から古墳時代の鉄剣では、茎の細長い例として長崎県下ガヤノキ遺跡B地点の例(小田ほか編1974)が挙げられる。そのほかには、茎の幅が若干広いものの、福井県向山B遺跡例(網谷編1991、弥生時代後期～終末期)、兵庫県権現山51号墳例(近藤編1991、古墳時代前期)などが似ている例として挙げられよう。しかし、三燕のものよりも茎の幅が広い短剣が大半を占め、違いは明らかである。

2 外装具の比較研究

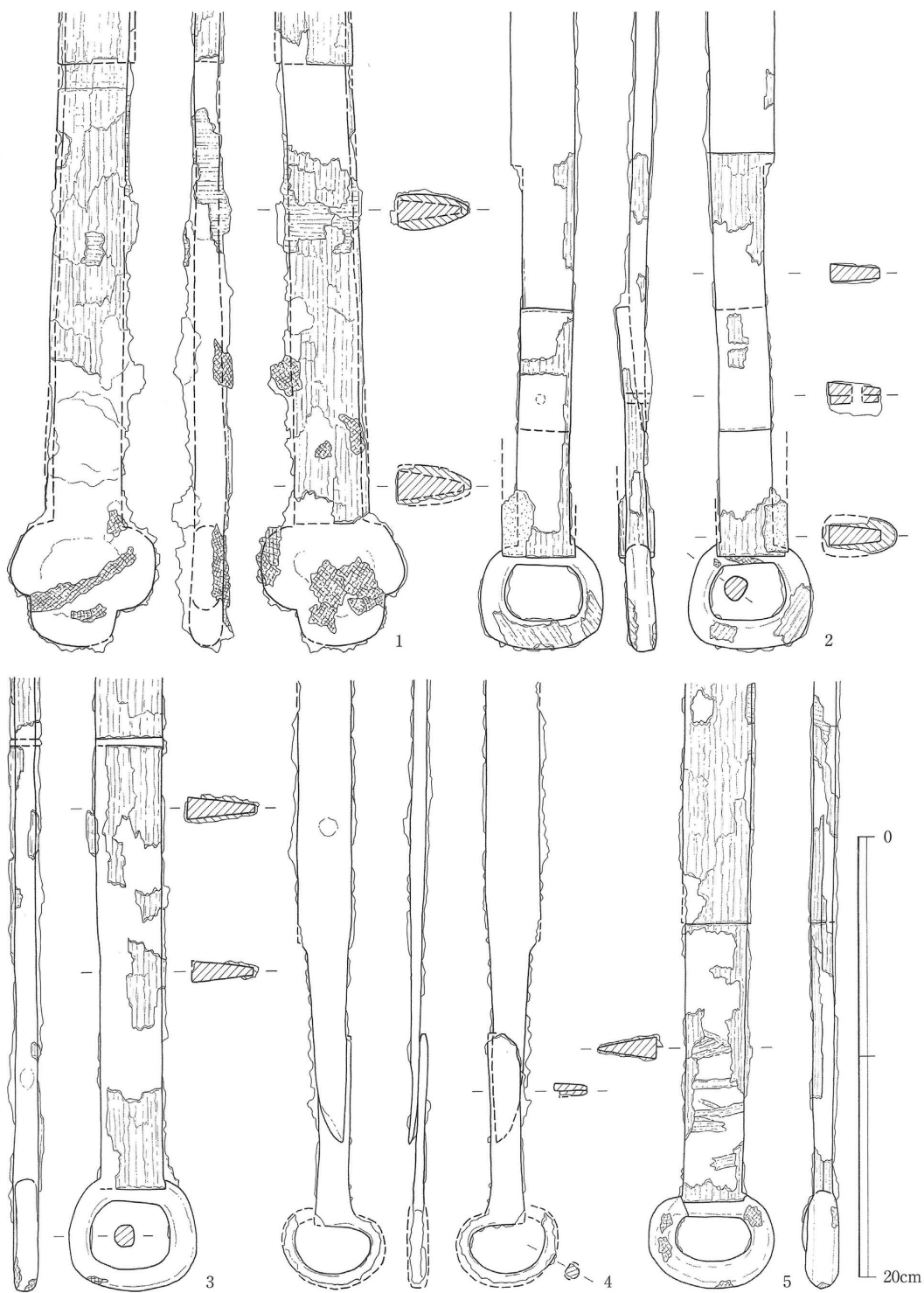
①環頭大刀の把

置田雅昭の研究 中国で出土した環頭大刀の外装については、置田雅昭の研究がある。置田は天理参考館が所蔵する中国製素環頭大刀の木製把を観察した。その結果、1本の把は背側から茎を挿入する溝を彫り、鉄刀の茎をはめ込む技法(以下、「落とし込み式」と呼ぶ)、もう1本は2枚の添え木の上に布と革を巻く技法であると述べた(置田1989)。

三燕の環頭大刀の把 三燕の環頭大刀にも、同じ構造の把がある。十二台88M1号墓例(図2-1)は茎の背に木質が見えず、落とし込み式把と判断できる。把縁(把の剣身寄りの部分)は把間(手で握る部分)よりも一回り細く削り(図版17-3)、一部が鞘に覆われる。表面には布が巻かれ、さらにその上に植物の繊維が巻かれている(図版17-2)。なお、三累とみられる環の表面にも布が残っており、手を通すための帯紐が着けられていたようだ。

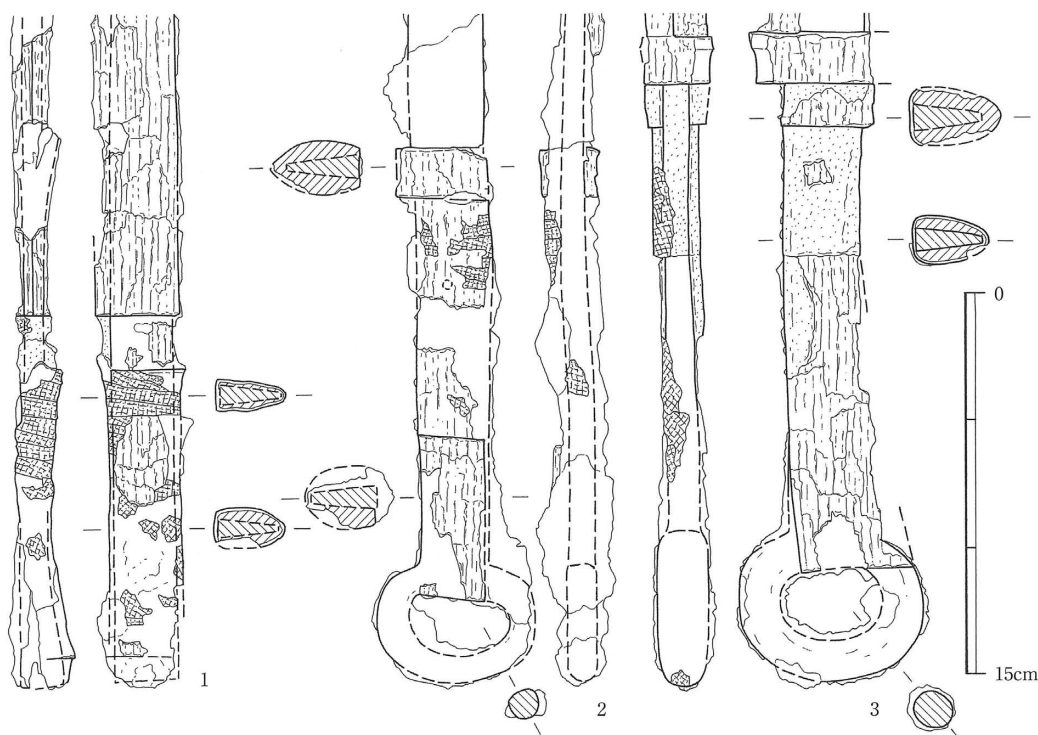
いっぽう、喇嘛洞遺跡では落とし込み式以外の把も存在する。喇嘛洞 I M10号墓例(図2-2)は、茎の背にも把の木質が見える。しかし、背の中央には2枚の木を合わせたような痕跡は見えず、一木作りなのか、二枚合わせなのかは判別できない。表面には布ではない有機質が巻かれており、質感からすると革巻かもしれない。把は環の付け根付近まで覆っている(図版17-7)。喇嘛洞 II M3号墓例(図2-3)、II M266号墓例も、残りは悪いが同じ構造と思われる。II M266号墓例は木質の下に細い樹皮が見え、樹皮を巻いた上に木製把を取り付けたことがわかる。

その他の環頭大刀では、把の痕跡が見えなかった。遺存状態にもよるが、拔身のまま使用されたものも多かったのであろう。



1. 十二台88M1 2. 喇嘛洞 I M10 3. 喇嘛洞 II M3 4. 喇嘛洞 II M209 5. 穴沢啄光氏蔵

図2 中国および三燕出土環頭大刀の把



1・2. 京都・椿井大塚山古墳 3. 島根・大成古墳

図3 日本出土大刀・環頭大刀の把

中国の二枚合わせ式 参考資料として提示した中国出土例(図2-5)は、茎の背に明瞭な木質の接合線が見え、二枚合わせ式の把を装着している。また、木の下には部分的に樹皮が見え、まず茎全体に樹皮を巻いたあと、木製把を装着したことがわかる。ただし、この1例のみでは中国で二枚合わせ式がどの程度普及していたのか判断できない。

日本の環頭大刀の把 日本の環頭大刀の把については、町田章、菊地芳朗、加藤一郎、橋本英将らの先行研究がある(町田1976、菊地1996、加藤2002、橋本2005)。筆者も弥生時代の鉄刀の把を論じる際に言及したことがある(豊島2004b)。それらの見解を再度まとめておこう。

まず、京都府左坂26号墓第2主体部出土の素環刀(今田編2001)、石川県七野1号墓の素環頭刀子(竹田1993)が二枚合わせ式の把を装着している。これらは弥生時代後期から終末期の例である。また、奈良県新沢48号墳の素環頭大刀も二枚合わせ式の把を装着している(加藤2002:124頁)。これは古墳時代中期の例である。しかし、京都府椿井大塚山古墳例(梅原1964)、島根県大成古墳例(渡辺ほか1999)などからみて、古墳時代前期の素環刀は大半が落とし込み式把を装着していたと考えられる。

落とし込み式把は中国の把に系譜をもつという見解がある(置田1989:83頁、菊地1996:63頁)。ただし、日本の落とし込み式把は、把縁を一回り太く作る点や、表面の装飾など、細部では中国

の把と異なる。したがって、中国で把を装着した鉄刀がそのまま搬入されたと考えるのではなく、中国から技法を導入し、日本独自の意匠を加えて製作したと考えたい(菊地1996: 63頁)。

また、出土地が不詳とはいえ中国における二枚合わせ式の例を初めて確認した。このことは、日本における二枚合わせ式から落とし込み式への変化が、日中で連動する変化であった可能性を示唆する。

②環頭大刀の鞘

装飾のある鞘 もっとも残りが良く、複雑な構造をもつのは十二台88M1号墓例である。注目すべきは鞘尻で、緑色の三角玉をはめ込む装飾が施されている(図版17-4)。鞘の合わせ目は見えない。表面にはまず細い植物繊維を巻き、さらに細い布帯を巻く。また、喇嘛洞Ⅱ M266号墓例は断面が台形の青銅製鞘口金具を使用している(図版17-8)。このような装飾をもつ鞘は日本では見つかっていない。

その他の鞘 喇嘛洞Ⅱ M3号墓例、Ⅰ M10号墓例は刀身に木製鞘が残っている。しかし、いずれも刀身の背の中央に鞘の合わせ目が確認できない。一案として、鞘の片面にのみ刀身の形を彫り込む特殊な二枚合わせ式であった可能性を考えたい。

また、参考資料の中国出土例は刀身の背の中央に明瞭な合わせ目が見える通有の二枚合わせ式である。木の上には樹皮、布、革が順番に巻かれている。

③剣の把と鞘

剣の把 三燕の鉄剣で把が残っているのは、喇嘛洞Ⅰ M10号墓例、Ⅱ M363号墓例である。いずれも把の側面に木の合わせ目が見えず、両側から穿孔した一木作りの把を装着したと推測できる。その他の資料では把の痕跡が見えないが、茎が細いため、把を装着せずに使用するのは困難であろう。

剣の鞘 剣の鞘は、喇嘛洞Ⅰ M10号墓例でのみ認められるが、詳細な構造は不明。Ⅱ M266号墓例とⅡ M363号墓例で剣身に布が残る。Ⅱ M266号墓例は目の粗い布の上に細かい布が巻かれている。Ⅱ M363号墓例は粗い布のみである。これらの布が鞘の代わりを果たした可能性がある。

日本の剣の把と鞘 日本の剣の装具では、鞘よりも把の構造が明らかにされている。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての木製把は大まかにいえば、二枚合わせ式→一木作り式(片側から穿孔)→一木作り式(両側から穿孔)へと変化する(豊島2004a)。喇嘛洞遺跡出土の把はいずれも日本の一木作り式(両側から穿孔)に対応すると考えられる。

鞘については喇嘛洞遺跡出土例の残りが良くないため、直接的な比較研究は難しい。

3 考 察

ここまで個別に述べてきたことを整理し、三燕と日本における刀剣の共通点と相違点をまとめよう。

共通点 鉄本体から見ると、共作りの環頭大刀は日本の例とよく似ている。この共通点から、一部の環頭大刀の製作地が中国の中原地域などに限定され、三燕や日本などの周辺地域に流通した可能性が推定できる。また、両地域における落とし込み式把の存在は、木製把の製作技法に東アジア規模の共通性があったことを示している。

相違点 まず、三燕の環頭大刀に別作りのものが存在する点は異なる。古墳時代の日本列島では環頭大刀よりも直刀が多い。直刀の成立については、環頭大刀の環頭部分が切断されたと推測されてきた。しかし、村上が指摘するように、別作りの環頭大刀の刀身部分のみが日本に輸入された(村上2001:66頁)ことも考慮すべきである³。

環頭大刀の把では、落とし込み式の技法に共通性が認められるが、細部の形と表面装飾が異なる。また、日本には玉の装飾をもつ鞘や青銅製鞘口金具がないことから、装具はそれぞれの地域で個別に作られた可能性が高い。

鉄剣は、全長や茎の型式などが大きく異なる。それぞれの地域で独自の発展を遂げる武器である。

おわりに

本稿では、三燕の鉄製武器について筆者の観察結果を詳述し、日本の資料との比較検討を試みた。遠く離れた2地域間の比較ではあるが、予想以上に共通点と相違点を明らかにできたと思う。今後は、中原地域や朝鮮半島の資料も含めた比較研究を進めたい。

註

- 1 穴沢味光氏蔵。2004年に会津で実測させていただいた。
- 2 従来の研究では、リングの部分のみを別に作ってから茎に取り付けるものを別作りと呼んでおり、本稿とは意味が異なる。
- 3 大阪府崇禅寺遺跡の素環頭大刀片は、取り外された別作りの環頭部分かもしれない。

参考文献

- 穴沢味光・馬目順一 1973「北燕・馮素弗墓の提起する問題—日本・朝鮮考古学との関連性—」『考古学 ジャーナル』第85号 ニューサイエンス社 pp.6-12
- 網谷克彦編 1991『若狭中核工業団地関係遺跡発掘調査報告書』福井県教育委員会
- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』No.1 島根県古代文化センター pp.41-104

- 今尾文昭 1982「素環頭鉄刀考」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第8冊 橿原考古学研究所 pp.15-62
- 今田昇一編 2001『左坂古墳(墳墓)群G支群』大宮町教育委員会
- 禹在柄 1991「素環刀の型式学的研究」『待兼山論叢』第25号 史学篇 大阪大学文学会 pp.83-113
- 梅原末治 1962「日本出土の漢中平の紀年太刀—大和櫛本東大寺山古墳新出土品—」『大和文化研究』第7巻11号 大和文化研究会 pp.15-25
- 梅原末治 1964「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』第24集 京都府教育委員会
- 小田富士雄ほか編 1974『対馬—浅茅湾とその周辺の考古学調査—』長崎県教育委員会
- 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 置田雅昭 1989「中国鉄素 環頭大刀の把の構造」『古文化談叢』第20巻(中) 九州古文化研究会 pp.77-84
- 加藤一郎 2002「素環頭鉄刀の把の構造について」杉山富雄編『鋤崎古墳—1981～1983年調査報告—』福岡市教育委員会 pp.122-126
- 菊地芳朗 1996「前期古墳出土刀剣の系譜」福永伸哉・杉井健編『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会 pp.49-82
- 児玉真一 1982「鉄製素環刀—集團墓出土資料を中心に—」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 pp.703-724
- 近藤義郎編 1991『権現山51号墳』同刊行会
- 竹田学 1993「七野墳墓群」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 p.153
- 豊島直博 2004a「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号 日本考古学会 pp.1-37
- 豊島直博 2004b「弥生時代の鉄刀の把」『考古学研究』第51巻第3号 考古学研究会 pp.53-72
- 豊島直博 2005「弥生時代における素環刀の地域性」大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学友の会 pp.227-245
- 橋本英将 2005「心合寺山古墳出土鉄製三葉環頭大刀の構造と意義」八尾市教育委員会生涯学習部文化財課編『心合寺山古墳整備事業報告書』八尾市教育委員会 pp.144-149
- 藤井康隆 2003「三燕における帯金具の新例をめぐって」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2 立命館大学考古学論集刊行会 pp.951-966
- 町田章 1976「環刀の系譜」『研究論集』奈良国立文化財研究所 pp.77-110
- 村上恭通 2001「日本海沿岸地域における鉄の消費形態—弥生時代後期を中心として—」『古代文化』第53巻第4号 古代学協会 pp.52-72
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」『考古学報』2004年第2期 pp.209-242
- 渡辺貞幸ほか 1999『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市教育委員会

【図版等出典】

本稿で使用した図面と写真は、豊島が作成した。